

〈特別寄稿〉

凌濛初「二拍」と『亘史』 —『拍案驚奇』巻二を中心に—

笠 見 弥 生

はじめに

「二拍」こと明末の文人による『拍案驚奇』（一名『初刻拍案驚奇』）及び『二刻拍案驚奇』は、崇禎元年（1628）、崇禎5年（1632）に相次いで出版された短篇白話小説集である。現存する『拍案驚奇』と『二刻拍案驚奇』はそれぞれ四十巻、各巻一作品の構成だが、『拍案驚奇』巻二十三と『二刻拍案驚奇』巻二十三が重複しており、また『二刻拍案驚奇』巻四十には戯曲が収められるため、短篇白話小説作品としては七十八作品が収められている。各作品は、白話小説の常として、常に講釈師を模した講釈師が聴衆、すなわち読者に語りかける形式がとられ、核となる物語（本稿では「正話」と呼ぶ）の前には一部を除いて枕となる短めの物語（本稿では「入話」と呼ぶ）が置かれる。多くの巻において、入話、正話とも凌濛初の完全な創作によるものではなく、同じ筋書きをもつ物語や記事の存在が指摘されてきた。しかし、凌濛初が「二拍」を編纂するにあたって用いた具体的な書籍やその版本については、検討の余地が残されている。

本項では凌濛初が「二拍」編纂時に用いたと考えられる書籍の一つ、『亘史』について検討したい。筆者は以前、「二拍」において凌濛初が既婚女性の不倫行為を描きながら彼女たちに団円といえる結末を与えていることについて論じ、本稿で取り上げる『拍案驚奇』巻二をその例の一つとして取り上げた¹。しかし発表後、『拍案驚奇』巻二の筋書きは、その概要から結末に至るまで潘之恒『亘史』所収の記事「両滴珠」に基づくものという韓結根氏の指摘に気づいた²。『亘史』「両滴珠」と『拍案驚奇』巻二の物語を比較することで、『拍案驚奇』巻二に込められた意図をより明確に読み取ることができるとは思われる。そこで本稿では、『亘史』「両滴珠」と『拍案驚奇』巻二の関係を確認した上で凌濛初の改変の傾向とその意図を検討し、更に凌濛初が見ることのできた『亘史』の版本についても考察を試みたい。

1 拙稿「許容された不義密通—凌濛初「二拍」を中心に」『日本中国学会報』第69集、2017。尚、後に同論文を改稿して収録した博士論文「凌濛初「二拍」の研究」（東京大学大学院人文社会系研究科・文学部2022年度）では『亘史』と『拍案驚奇』巻二について初歩的な言及をした。

2 韓結根「『亘史』与「二拍」—「二拍」藍本考之一」（『明代徽州文学研究』、復旦大学出版社、2006。初出は『復旦学報』（社会科学版）2004年第1期）。

一、『拍案驚奇』巻二のあらすじと構成

『拍案驚奇』巻二は題目を「姚滴珠避羞惹羞 鄭月娥将錯就錯（姚滴珠は恥辱を避けて恥辱をひきよせ、鄭月娥はあやまちにあやまちを重ねる）」という³。本作品は冒頭に詩がおかれて始まり、講釈師が読者に語りかける講釈、枕となる入話、再び講釈師による講釈と詩のあとに正話があり、最後に再び講釈師が詩を詠んで終わる。まず、入話は宋の柔福公主の偽物が引き起こした事件を語る。そのあらすじは以下のとおりである。

舞台は宋、靖康の変で欽宗・徽宗の二皇帝と共に金に連れていかれた后妃の中に欽宗の娘、柔福公主がいた。後に高宗即位後の建炎4年（1130）に柔福公主を名乗る女性が現れ、自力で逃げてきたという。旧臣たちに確認させたり宮中の事を知っているか聞いた結果本物と思われたため、加号して福国長公主とし、降嫁させた。ところが紹興12年（1142）になって捕虜になっていた高宗の母が帰国し、本当の柔福公主は死んだという。偽の柔福公主は自分がもともと汴梁の巫女であり、宮女から宮中の内情などを聞いてなりすましたことを白状したため、死刑に処されることとなった。

正話は、姚滴珠という女性とその偽物をめぐる物語である。舞台は万暦年間、姚滴珠は徽州府休寧県蓀田郷の姚家の娘である。以下に、物語を三つの部分に分けてあらすじを記す。

第一の部分は、姚滴珠が嫁いってから出奔し、他の男の妾になる過程を描く。姚滴珠は豊富な家庭で育ったが、十六歳で貧乏な潘家に嫁ぐ。夫潘甲との仲は良好であったが、新婚二か月で夫は出稼ぎに行かされ、滴珠は舅姑と三人で過ごすことになった。しかし舅姑と折り合いが悪く、ある日滴珠は実家に帰ろうと家を出る。その道中でごろつきの汪錫に出くわし、騙されて誘拐されるも居心地のよさに汪錫の家に居ついてしまい、商人呉大郎の妾になることを承諾し、妾として二年間を過ごす。

第二の部分は、滴珠を搜索する中で滴珠の兄姚乙が滴珠にそっくりな妓女鄭月娥に出会って深い仲になり、身代わりとして連れ帰るまでを描く。滴珠の出奔後、滴珠の行方をめぐって、婚家と実家との間で訴訟沙汰になった。浙江衢州の花街で姚滴珠そっくりの妓女を見かけたという情報が寄せられ、兄が探しに行くと鄭月娥という瓜二つの別人だった。ところが兄は鄭月娥を身代わりにするにすることで、深い仲になってしまう。そして故郷へ連れ帰ると、実の両親すら本物の滴珠と信じた。

3 以下『拍案驚奇』巻二については、『初刻拍案驚奇』（ゆまに書房、1986）に収める日光輪王寺蔵四十巻本の影印に基づく。

第三の部分は、鄭月娥が偽物であるとばれ、真の滴珠が発見されて、登場人物たちに裁きが下されて物語が終わるまでを描く。身代わりになった鄭月娥は姚滴珠として裁きの場に連れてこられる。夫の潘甲も一度は本物と思って家に連れ帰ったが、翌日偽物であると再度訴え出たため、知県の策略によって捜索が行われ、本物の姚滴珠が見つげ出された。王婆は捕吏たちの襲来に驚いて首を吊ってしまう。汪錫は逃げたものの、他の殺人に関与したことで捕まり、裁きの場に通りかかった滴珠が誘拐犯だと叫ぶ。汪錫は叩き刑に処されて死に、姚滴珠は元どおり夫のもとへ帰った。姚乙は従軍、鄭月娥は官売に付されたが、両親が鄭月娥を買い取って妻として付き添わせ、後に恩赦を得ると二人で故郷に戻って暮らした。

語り手である講釈師は、物語の前後に詩や散文の講釈を添えて、物語の主題を読者に呈示する。本作品では、作品冒頭の詩及びそれに附された講釈、入話と正話の間の講釈と詩、そして正話におかれる総括の詩に至るまで、赤の他人ながら容貌がそっくりという主題が繰り返されている⁴。

更に、「二拍」所収作品には評点が付されており、特に『拍案驚奇』の場合には、輪王寺所蔵の四十巻本の封面に「即空観評閲出像小説」とあり、即空観主人こと凌濛初自身による評点であることが明記されている。本文を見ると、ところどころに圈点、具体的には傍点「、」及び傍圈「○」が付され、行間及び欄外上部に評語が付されている。『拍案驚奇』巻二についても、評語や圈点が随所に見られる。凌濛初は読者が評点とともに本文を読むことを想定していたはずであり、『拍案驚奇』巻二を読み解く上でも評点は重要な手がかりになろう。

二、『拍案驚奇』巻二は何に基づいて作られたか

小川陽一『三言二拍本事論考集成』⁵にまとめられているように、『拍案驚奇』巻二は、入話は『西湖遊覧志余』等との関連が指摘され、正話については関連作品が見つかっていなかった。

入話については、物語の前に「西湖志余に拠れば、宋の時代にある事件がありました（按西湖志余上面、宋時有一事也）」とある。「西湖志余」とは明・田汝成『西湖遊覧志余』のことと考えられ、『西湖遊覧志余』巻六「版蕩淒涼」中に入話と同じ筋書きの記事が見える。『拍案驚奇』巻二の入話が物語前後の講釈師による批評等を除く物語部分だけで800字弱であるのに対し、『西湖遊覧志余』中の記事は94字と短いですが、筋書きは等しく、建炎4年、紹興12年という年の記述、偽物がせしめた「四十七万緡銭」という金額の記

4 『拍案驚奇』巻二の冒頭、入話と正話の間、末尾の詩や講釈の内容については拙稿「『初・二刻拍案驚奇』における挿入句」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第19号、2016）で取り上げた。

5 小川陽一『三言二拍本事論考集成』（新典社、1981）。

述も一致しており、『西湖遊覧志余』に基づいて書かれたものと考えて不自然ではない。

尚、『宋史』巻二百四十八列伝第七公主「徽宗三十四女」の項にも同趣旨の記事があるが、偽物の正体を巫女ではなく尼僧李静善としたり、偽物と証言する人物が増えたりと多少の違いがある。その他『四朝聞見録』、『鶴林玉露』等にも柔福公主の同趣旨の話が載せられているが、少しずつ内容が異なり、『西湖遊覧志余』の記事が最も近い。こうしたことから、「西湖志余」に拠るとする『拍案驚奇』巻二本文中の記述は、凌濛初が『西湖遊覧志余』に基づいて入話を敷衍したことを示していると考えられよう。

正話については、本文末尾に「徽州では今に至るまで伝えられて笑い話になっています（徽州至今伝為笑談）」とあるが、具体的に何に基づいたかは記されておらず、類話も見つかっていなかった。

ところが、韓結根氏は潘之恒『亘史』を「二拍」の藍本の一つと指摘し、『拍案驚奇』巻二、三、四、十六、二十五、『二刻拍案驚奇』巻三十を『亘史』に基づく作品とした⁶。『拍案驚奇』巻二については、正話は『亘史』「兩滴珠」（天啓『亘史』外紀卷十四艶部、『亘史鈔』外紀卷十。版本については後述）に見える姚滴珠の記事、入話はその附録であり、冒頭に「西湖志余」とある柔福公主の記事に基づくものという。

結論から言えば、『拍案驚奇』巻二については、現状では韓氏の指摘を退ける材料は見当たらない。正話については、韓氏が述べるように登場人物の名前も等しく、その他に同じ記事を載せる書籍は見つかっていない。

入話については、『西湖遊覧志余』と『亘史』の記事とを比べてみると、前者の版本によって多少異なるがいずれにしても数字の異同があるに過ぎず、『拍案驚奇』巻二がどちらに基づいたかを示すほどの違いはないように見受けられる。韓氏は、章培恒氏が、『拍案驚奇』巻二の文中に見える「聚逐」の二字は意味が通らず、『西湖遊覧志余』や『鶴林玉露』では同語を「驅逐」としていると述べている点を取り上げ⁷、『亘史』が「聚逐」の二字を用いていることは、潘之恒の出身地である歙県の方言の影響であり、『拍案驚奇』巻二が『亘史』に基づいて作られた証であると述べている。しかし現存する『西湖遊覧志余』を見ると版本によって「聚逐」とするものがあり、たとえば中華書局排印本（1958）や、その底本である嘉靖刊本は「聚逐」に作る。この「聚逐」の一語をもって『拍案驚奇』巻二が『亘史』に基づいた証左とするのは難しいだろう⁸。

しかし、それでも『亘史』「兩滴珠」は、現在指摘されている中で『拍案驚奇』巻二に最も近い内容をもつ記事である。姚滴珠の物語と柔福公主の記事が並べられる資料が他に見つかっていないこと、附録冒頭に「西湖志余」とあって、『拍案驚奇』巻二本文

6 注2参照。尚、韓結根氏の指摘のうち、『二刻拍案驚奇』巻三十については『亘史』に基づいたといえるか疑問の余地があり、拙稿「凌濛初「二拍」が基づいた書籍—「二刻拍案驚奇」巻三十の取材源について」（『明清文学論集』編集委員会編『明清文学論集 その楽しさ その広がり』東方書店、2024）で取り上げた。

7 『拍案驚奇』（上海古籍出版社、1982）章培恒「校点説明」。

8 章培恒氏らの見たテキストは不明だが、丁氏嘉惠堂『武林掌故叢編』所収本及びそれに基づく浙江人民出版社による排印本（杭州掌故叢書、1980）は「驅逐」に作る。

中に示された「西湖志余」という書名はそれに由来すると考えられることから、『拍案驚奇』巻二が『巨史』に基づいた作品であると考えるのが妥当であろう。

三、『拍案驚奇』巻二と『巨史』の比較

本節では、凌濛初が『巨史』「兩滴珠」の記事をもとに『拍案驚奇』巻二を編んだという前提で、改変度合いの大きい正話について両者を比較してみたい。更に別の可能性がないとは言いきれないが、両者の傾向の違いを見ることには意義があろう。韓氏は、登場人物の名前、舞台となる年や場所、一部の文章、人物のセリフに至るまで両者が一致していると述べ、その類似性を強調した。舞台となる年については、『巨史』「兩滴珠」が万暦甲辰年とするのを『拍案驚奇』巻二では「万暦年間」と少し幅を持たせているがほぼ同じであること、舞台となった場所については『巨史』が「海陽」とするのを『拍案驚奇』では「休寧」としているが、「海陽」は「休寧」の古名であって同じ場所を指しているとし、舞台については年も場所も等しいという。但し、以下の点で『拍案驚奇』巻二に改変が見られるとする。

- ・『巨史』「兩滴珠」では名前が記されていない人物に対し、『拍案驚奇』巻二では「王婆」「呉大郎」「周少溪」「鄭月娥」「程金」という名前を与えている
- ・『巨史』「兩滴珠」では汪錫が滴珠に妾になることを勧めるのに対し、『拍案驚奇』巻二では王婆がその役割を果たす
- ・潘甲が一度は偽物を妻として連れ帰りながら翌日偽物であると再度訴え出たあとに知県が本物の姚滴を探す場面で、『巨史』「兩滴珠」では単にあちこちを探させたとしか書いていないものを、『拍案驚奇』巻二ではすでに姚滴珠が見つかったとする偽の告示を出すくだりが付け加えられている
- ・『巨史』「兩滴珠」では判決が出て終わりだが、『拍案驚奇』巻二ではその後に姚父が鄭月娥の身を贖い従軍した息子姚乙の元に行かせ、後に赦されて故郷に戻ったあと夫婦になる

しかし韓氏はそもそも『巨史』が『拍案驚奇』の藍本の一つであったことを明らかにすることを目的としているため、改変の意図については凌濛初が「物語の読み応えを強化するために、想像力を発揮したもの」⁹として、それ以上は踏み込んでいない。しかし、改変された部分に着目して改めて見てみると、『拍案驚奇』巻二は『巨史』「兩滴珠」の物語をほとんどそのまま引き継いでいるものの、『巨史』の記事1016字に対し、『拍案驚奇』巻二は正話の部分だけでもおおよそ10000字と相当の加筆が施されており、その加筆の内容から凌濛初が『巨史』「兩滴珠」をどのように受け止めたか、そしてそれをどう読者に伝えようとしたかが見えてくる。

9 原文「為了加強故事的可讀性、而加以想像發揮的」、韓結根氏注2 論考460-461頁。

第一節で紹介したように、この物語は大きく三つの部分、すなわち姚滴珠が婚家から出奔し、ごろつき汪錫の隠れ家に居着き、呉大郎の妾に収まるまでの第一部分、滴珠の兄姚乙が滴珠そっくりの妓女鄭月娥と深い仲になり、身代わりとして連れ帰る第二部分、鄭月娥が偽物であったことがばれて真の滴珠が見つげ出され、汪錫も捕らえられて皆に判決が下る第三部分に分けることができる。これに従って『亘史』「兩滴珠」を三部分に分けてみると、『亘史』全1016字のうち、第一の部分が252字、第二の部分が381字、第三の部分が383字となる。同様に『拍案驚奇』巻二の正話を分けてみると、第一部分がおよそ4500字、第二部分がおよそ3500字、第三部分がおよそ2000字と、第一部分の姚滴珠が呉大郎の妾になって汪錫の隠れ家に居着いてしまう部分に最も大きな重点がおかれ、続いて姚乙と鄭月娥を描く第二部分、そして結末に向かう第三部分というように、物語の重点に濃淡が生まれているように見える。

続いて、どのように加筆が行われたのか、第一部分から順を追って見ていこう。この部分における加筆は、姚滴珠の舅姑の意地悪さ、滴珠の若く幼気な人物像を印象付けると同時に、汪錫の家や呉大郎の良さを強調し、誘拐された先で妾として過ごす滴珠の行動に合理性を増し、読者が批判的にとらえないようにすることに心を砕いているように見受けられる。参考までに、『亘史』「兩滴珠」の第一部分の原文を以下に引用しておく¹⁰。

滴珠、海陽姚氏女也、住蓀田、年十六嫁為屯溪潘甲婦。既婚二月而甲出賈、姚故饒而潘歉、舅寧甚、嗃嗃新婦不甘食貧、習操作、將倚市門而招金夫、乃得逸耳。滴珠頗具艷姿、憤其語為褻已。侵曉奔、訴母家、泣於渡口。狙者汪錫乘筏來、問曰「娘子欲渡耶」。曰、「然」。接之上、而泛諸水裔、問曰、「娘子獨身將安之。又悲以泣、吾不能無疑、或逃或溺、為地方累。曷少停吾家、吾告若父來迎汝」。欲遽淫之、不可。為婦計曰、「与其守空床、取舅姑詈、孰若衣綺食甘、而偶俊少。令漁色者得汝、必珍愛如掌珠。吾匿汝可以滅跡、則汝終身受福無尽矣」。滴珠不能應。遂誘商山某氏、以為己女新寡而欲嫁者。某氏窺而悅之、曰、「吾不能娶、求暫為歡」、月給餉汪錫十金。如是者二年余矣。

これに対して、『拍案驚奇』巻二でどのような加筆が行われたかを見て行こう。まず、姚家と潘家の関係について、『亘史』「兩滴珠」に「姚家は豊かであったが潘家は貧しかった（姚故饒而潘歉）」と記されていたものを、『拍案驚奇』巻二ではこの対比をより明確にした上で、巧みな仲人口によって本来釣り合わない家格が引き合わされたこと、しかし滴珠と潘甲の間には確たる愛情ははぐくまれ、夫婦仲は良好であったことが丁寧に説明される。特に家格の釣り合わない結婚が行われた理由として仲人口の巧みさをいう場面には圈点が付され、強調されている。

10 『亘史』国立公文書館蔵本に基づく。『四庫全書存目叢書』所収影印浙江図書館蔵『亘史鈔』残本によって、両者が同文であることを確認した。以下同。

続いて、姚滴珠が家出する理由となる、夫不在中の舅姑との不仲について、夫不在の中姚滴珠が舅姑からいびられる様が具体的なセリフが複数書き加えられ、朝寝坊した姚滴珠を「淫婦」「賤淫婦」と呼んで罵るなど、姚滴珠が出奔に至るのも無理はないと思わせる描写がなされている。舅姑の滴珠に対する態度が明らかにひどいものであったという印象を強めようとしていると考えられよう。

そして、汪錫の隠れ家に来るまでの過程も姚滴珠がやむを得ずついていったと受け取れるように描写が加えられている。まず、汪錫が地元で有名なごろつきであったことが書き加えられる。また、汪錫と滴珠との会話が書き加えられ、滴珠が現状を説明しつつも実家に帰ると主張するのを、汪錫がしつこく説得して隠れ家に連れて行く様子がセリフを交えて具体的に描かれる。こうした加筆は、汪錫がお嬢様育ちで若い姚滴珠より何枚も上手であったことを強調し、姚滴珠の行動をやむを得ないものと印象付けることにつながろう。一方で、汪錫が滴珠に関係を迫る場面で、『亘史』では「にわかには滴珠を犯そうと思ったが、できなかった（欲違淫之、不可）」とのみ記されていたのを、滴珠が貞操を守るためなら自害も辞さないという強いセリフで拒否する様子が描かれ、圈点が付されている。

更に、逃げずに汪錫の家に留まった理由も丁寧に説明される。まず、汪錫の隠れ家が小体ながらも美しく整えられている様が美文を用いて描写されるが、その中でも「壁の絵は周之冕、机の砂壺（急須）は時大彬（壁間紙画周之冕、桌上砂壺時大彬）」という部分には傍圈が付されて強調されている。周之冕は画家の名、時大彬は陶工の名で、いずれも明末の人物である。周之冕は、王世貞が「呉郡で花卉を描く者で沈啓南の後は陳道復と陸叔平が尊ばれるが、陳は妙ではあるが真でない、陸は真ではあるが妙でない、之冕は二子の長所を兼ねている」¹¹と評価したといい、時大彬は常州宜興の人で砂壺の作り手として明人の著述にその名が見え、謝肇淛『五雜俎』に茶器について「宜興の時大彬が作る陶器が一時尊ばれ、値段が跳ね上がった」¹²と記される等、高級品とされていたことがわかる。この部分に圈点が付されているのは、そうした品物が置かれる瀟洒な屋敷であったことを読者に強調しようとする意図の表れであろう。更に、後にこの家に住んだまま呉大郎の妾になることを勧められた滴珠について、「滴珠はずっとこのきれいな部屋を好ましく思っていましたし、呉大郎という人も気に入りました（滴珠一了喜歡這個乾淨房臥、又看上了呉大郎人物）」といい、その部分にも圈点が付されている。こうしたことから、凌濛初は滴珠が汪錫の隠れ家に居残る理由付けの一つとして、家の居心地よさを強調したものと推測できよう。

そして、『拍案驚奇』巻二では滴珠を妾になるよう説得する役割を「王婆」が担う。『亘史』「両滴珠」では第三部分で汪錫がつかまる直前に「村媪」が登場し、捕吏を隠れ家

11 原文「呉郡写花卉、沈啓南後推陳道復、陸叔平。然陳妙而不真、陸真而不妙、之冕能兼二子之長」中国地方志集成江蘇府県志輯『光緒常昭合志稿』（江蘇古籍出版社、1991）卷三十二人物十一之二画家、551頁。

12 「茶注……宜興時大彬所製瓦瓶一時伝尚、価遂踴貴」謝肇淛『五雜俎』（上海書店出版社、2009）卷十二物部四、246頁。

に案内するが、後述するとおりこの村媼の正体は説明されない。『拍案驚奇』巻二では、村媼により明確な人格を与えた人物と考えられる王婆が早々に登場し、滴珠の舅姑に対する愚痴を言葉巧みに引き出して慰め、家に帰らずに汪錫の家に居続ける選択に導く重要な役割を果たす。滴珠の内心の描写や、王婆と滴珠の具体的なやりとりが書き加えられ、年若く分別に欠ける滴珠が、汪錫の家に留まる選択をする合理性が一層増している。この部分には圈点が多く見られるほか、滴珠に対して「かわいそう（可憐）」という語を用いた評語が三か所、王婆が言葉巧みに滴珠を説得するセリフには「はじまった（来了）」という評語が二か所、そして滴珠が王婆の説得に心を動かさず場面では「動かさざるを得ない（不由不動）」という評語が見られる。本文のみならず評点も滴珠に同情的な立場から付されていることがわかっていく。

そして第一の部分で特に加筆が著しいのが、呉大郎と滴珠が出会い、関係を深める場面である。『亘史』『両滴珠』では「商山某氏」が滴珠を覗き見て気に入り、正式には娶らずたまの楽しみにして、月に十金の報償を汪錫に渡したと書かれているのみだが、『拍案驚奇』巻二では滴珠を囲った人物に「呉大郎」という名前が与えられ、金持ちで色好み、且つごろつきとも関わりのある人物という設定が加わり、洒落者らしい姿が描写される。そして良家の娘らしく男の前に姿を見せようとしないう滴珠を王婆らが言葉巧みに男と同席させる様子、呉大郎の見目の良さに滴珠が心惹かれ迷いながらも囲い者になることを王婆に了承する様子、閨の描写等が会話をふんだんに交えて丁寧な描写されている。

特筆すべきは、報奨に関する記述である。『亘史』『両滴珠』では月々の手当て十金が汪錫に渡されたとするのみであるが、『拍案驚奇』巻二では最初に聘金として銀八百両と衣服や宝飾品が渡される。その銀八百両の内半分が滴珠に渡されたことが次のように記される。

婆さんはまた汪錫と相談を済ませてくると、滴珠に「お嬢さんおめでとうございませ、あなたの話はまとまりましたよ」と言いました。そして呉家の銀子四百両を手手に、にこにこ笑って、「銀八百両は、あなたが半分を取り、私たち二人が半分を分けて仲人代としますよ」と言いました。並べて見ると、机の上でキラキラと光って、滴珠はとても喜びました。講釈師さん、話し間違えたでしょう、このごろつきと取り持ち女が金を見れば、蠅が血を見るのと同じ、どうして人心天理に基づいて、半分を彼女に分け与えるなんてことがありますか。お客さん、理由があるのです。婆さんは一つには滴珠の面前でお金を見せびらかして、彼女の歓心を買おうとしているのです。二つにはいずれにせよ彼らの家において、物がどこかに持っていかれてしまふ心配はないし、どうせ少しずつ騙し取って、取り戻してしまうのです。もし滴珠にいくらかものを渡さないと、後で呉大郎と仲良くなった後で本当のことを話されてしまって、自分たちの返せと言われては、却ってよくないでしょう。これは真にしたたかなやりて婆の巧妙な手口なのです。

婆子又与汪錫計較定了、来对滴珠説、「恭喜娘子、你事已成了」。就拿了吳家銀子四百兩、笑嘻嘻的道、「銀八百兩、你収一半、我兩人分一半做媒錢」。擺将出来、擺得桌上白晃晃的、滴珠可也喜歡。說話的、你說錯了、這光棍牙婆見了銀子、如蒼蠅見血、怎還肯人心天理分這一半与他。看官、有個緣故。他一者要在滴珠面前誇耀富貴、買下他心。二者總是在他家裡、東西不怕他走趨那裡去了、少不得逐漸哄的出来、仍旧元在。若不与滴珠些東西、後來吳大郎相處了、怕他説出真情、要倒他們的出来、反為不美。這正是老虔婆神機妙算。

つまり、吳大郎からもらった八百兩のうち、四百兩を滴珠に渡したのは、滴珠を納得させようとする王婆の企みであったというわけである。この部分にも圈点が付され、行間には「ここが巧妙なところ（妙在此）」という評語もある。凌濛初にとってこの部分の加筆がかなり意図的なものであったことが示されている。このように先に詳しく描写された汪錫の隠れ家の快適さに加えて、吳大郎から受け取る金銭が滴珠にも渡ったことを示すことで、若く分別の足らない滴珠が、逃げ出そうとせずに囲い者として居続けてしまうことを自然な成り行きに見せているといえよう。

続いて第二の部分、すなわち、滴珠の兄姚乙が滴珠そっくりの妓女鄭月娥と出会い、身代わりとして連れ帰る場面を見てみよう。『巨史』「兩滴珠」の該当部分は次のとおりである。

初潘既失婦、或見之津口、以為婦也。怒而不之逆、既而母家来詢、婦固未婦也。舅姑大譟、召子甲婦而訟之官、「安得匿吾婦而轉鬻之」。姚父大負冤、然無影響可跡。而潘甲訟之愈急、隣里莫不伝為奇談。一日、姚之密親賈於衢、見一娼、宛然滴珠也。而不敢問、婦報於父、父信之、是必轉販為娼。密遣子賚百金往贖、冀載婦、可息訟耳。其子促之衢、見娼宛然滴珠也。疾呼之、娼笑不答。其子不能積疑、「安有吾妹而忽然於兄。当畏其家而恐泄也」。客為謀者、「曷与求宿。是汝妹也、密約之。非汝妹也、舍之可也」。姚乃置酒、召而狎之、知非妹矣。娼固詰其繇来。語之故、倡曰、「君能贖我、我請真為君妹可乎」。姚曰、「貌似矣、而音殊也。且鄉里族属皆昧、将奈何」。倡曰、「人憾貌不同爾、音隨地移、胡可辨也。鄉里族属、君得為吾熟之、況与君偕、能日相詔也」。姚大以為然、旦日告同郡人曰「真吾妹也」。衆訟於太守、立斷回宗。倡家買自某生員妾、坐是亦褫衣冠。姚遂載之婦。里人迎於里、父母迎於門、歡然相對、称号一無所失。咸曰「幸哉、滴珠之婦矣」。父曰「胡去此二年而音之似衢也」。母亦曰「趾爪不似前矣」。相与飲泣而罷。

『巨史』「兩滴珠」の記述では、衢州の妓女に滴珠そっくりの者がいると知った姚父が滴珠の兄に見に行かせ、兄がたしかに滴珠そっくりな妓女を見かけて声をかけるも笑うばかりで答えず、客になってみたところ、他人の空似であることが判明する。しかし事情を知った妓女から、顔がそっくりで訛りが違うだけならば騙しとおせると持ちかけら

れて受け入れ、妹として連れ帰る。妓女の名前は記されず、姚乙という兄の名前も第三部分の裁きの段階まで出てこない。

これに対して『拍案驚奇』巻二では、登場時から滴珠の兄に姚乙、妓女に鄭月娥という名前が与えられ、更には『亘史』「兩滴珠」で姚父に滴珠と思しき妓女存在を知らせたり、滴珠の兄に同行しているらしい人物が『亘史』では「密親」「客為謀者」「同郡人」等と漠然と記されるのみであったのを、「周少溪」という名前を与えて一貫して同行している設定を明確にしている。

鄭月娥については良家の子女出身で秀才の妾になったが、売り飛ばされて妓女になったという来歴、妓楼でひどい待遇を受けていること等が記されており、妓女に対する好印象を導く意図が感じられる。また、妓楼から請け出す際には、自分を売り飛ばした秀才や妓楼の女将への仕返しを果たし、溜飲を下げるくだりが追加される。また、滴珠の兄と鄭月娥が男女の関係になっていることが繰り返し記される。『亘史』「兩滴珠」では名のない脇役だった鄭月娥に名前と明確な来歴が与えられ、格段に存在感を増しているといえよう。

続いて第三の部分、鄭月娥が偽物であることがばれ、真の滴珠が発見されて汪錫が捕らえられ、登場人物それぞれに裁きが出るまでの場面を見てみよう。『亘史』「兩滴珠」の該当部分は以下のとおりである。

明日送至県令、舅姑壻俱来認之。舅姑曰「吾婦也」。壻亦曰「吾妻也。曷与同婦乎」。越宿而潘甲哭諸県庭、曰「非予妻也」。令朴之十、曰「官謀俱在、父母子之矣、姑嫜婦之矣。而子独以為非妻也、誰欺哉」。潘甲曰「官安能得以非人妻而妻人哉。予訟予妻、非訟人之妻。寧令大索予妻而終不得、不願誤認人妻」。令大異、遣偵卒四出覓之。忽遇汪錫随一村媪行。卒喝錫曰「公事敗矣、尚安行哉」。錫面赤曰「公無恐我。欲酒則酒公矣」。卒曰「酒我、復何言哉」。飲畢而散。有頃、村媪来。卒執而訊之、村媪曰「無我執、有尤物、能令汝見之、足以贖矣」。卒随至商山一書室内。媪入呼曰「倩来矣」。有艶婦趨而出、宛然公庭之滴珠也。卒告寓主、明日拘入官、則兩滴珠俱在。県令無以辨。於是假滴珠始供姚乙之謀、而真滴珠供汪錫之誘。汪錫逃未獲、申府之日会汪錫以拐汪汝鸞家婢、掩口至死。同日過庭、真滴珠認之、大呼曰「此即汪錫也」。其死汪婢有二人、錫掩口而程搯之喉。歛令論程絞而錫戍。太守曰「錫尤首惡、論死之。假滴珠官売、而真滴珠与甲夫婦如初、其兄亦論戍事。在万曆甲辰年、太守梁公、休寧令李公、歛令方公也。

この部分、『亘史』「兩滴珠」に書かれた成り行きは、些かわかりにくい。まず、滴珠を探しに出た偵卒が汪錫と村媪に会い、捕吏が汪錫を怒鳴りつけると汪錫は偵卒たちに酒をおごる。酒を飲んで解散したあとで村媪が再来し、問いつめると滴珠のところに案内したので、真の滴珠が発見される。しかし、なぜ捕吏が汪錫を脅して酒をおごらせて

いるのか、汪錫と共にいた村媪が何者なのか、村媪はなぜ戻ってきたのか、等いくつかの疑問が生じる余地がある。

これに対し『拍案驚奇』巻二では、村媪にあたる王婆を第一部分から登場させ、汪錫の片腕的働きをさせている。更に知県がわざと滴珠が発見されたことを知らせる告示を出したためにそれを見に二人が出てきたこと、捕吏に酒を飲ませている間に汪錫が逃げおおせ、残された王婆がやむなく滴珠のところに案内したこと等が記されており、滴珠が発見されるまでの過程が破綻なく説明されているといえるだろう。この部分は凌濛初にとって重要な加筆であったと見え、圈点が付された部分が散見されるほか、知県が潘甲に滴珠が偽物であったことを黙っているように言い含める部分には「すばらしい、すばらしい（妙、妙）」、滴珠がすでに見つかった告示を出すところでは「よろしい（好着）」と行間に評語を付している。

その後汪錫は汪汝鸞家の下女を殺してしまったことで、捕らえられる。『亘史』「両滴珠」では汪錫が下女を殺した理由は書かれておらず、単に悪事を重ねた末に偶然捕らえられ、同じ日に役所にいた滴珠がそれを見つけて自分を誘拐した犯人だと叫ぶ。それに対して『拍案驚奇』巻二では、二つの事件につながりがもたせられ、滴珠に下女を所望されて汪汝鸞の家婢に目を付けていたことが記される。『拍案驚奇』巻二における汪錫は悪人ではあるものの、滴珠を一度は犯そうとしたもののその権幕に押されて簡単に諦め、その後は乱暴に扱うこともなく、その求めに応じて下女を探す等、あくまでも小悪党であって極悪人には見えない描き方をされているように見える。しかし姚滴珠は、呉大郎については知県に尋ねられてもしらを切りながら、汪錫をかばおうとする素振りは見せない。姚滴珠の呉大郎に対する情愛を示そうとしたものであろう。

また『亘史』「両滴珠」においては、下女を殺した際に程なる人物がおり、「錫が口をふさぎ程がその喉をおさえた（錫掩口而程搯之喉）」と「程」なる人物が唐突に現れて後に絞殺刑に処されるのに対し、『拍案驚奇』巻二では予め「汪錫はというと酒屋から逃げたあと、仲間の程金に行きあい、一緒になって、歙県までやってきました（却説汪錫自酒店逃去之後、撞著同夥程金、一同作伴、走到歙県地方）」と程金という同行者の存在を記している。このように、真の滴珠が見つかって汪錫が捕らえられるまでの場面において、『拍案驚奇』巻二は『亘史』「両滴珠」の説明不足だった点を補い、読者を納得させられる記述になっているといえるだろう。

最後に下される判決については、汪錫が当初従軍を命じられながら太守の怒りに触れて死刑になったこと、滴珠が元通り潘甲のもとへ夫婦として戻ったこと、偽の滴珠が官売に付されたこと、兄が従軍させられたことは両者共通している。そして『拍案驚奇』巻二では更に、呉大郎が世情に長けていたために処罰を逃れたこと、そして滴珠の兄が従軍することを知った偽の滴珠が、自分のせいでこうなったのだからついでと大泣きしたため、姚父の計らいで随行し、後に恩赦にあつて揃って帰郷、夫婦になるという結末が加わっている。

以上、『巨史』「両滴珠」から『拍案驚奇』巻二正話にどのような改変が加えられているか、三つの部分に分けてみてきた。第一の部分に描かれた、姚滴珠が婚家を出奔する道中で知らぬ男に誘われるままについていき、挙句商人の妾になって婚家にも実家にも帰らないという展開は、一般的に見てほめられた行動ではあるまい。しかし凌濛初は彼女の行動をかばおうとしているかのような加筆によって、その行動に丁寧な理由付けをしており、読者が滴珠の行動に否定的な感情を抱かないように工夫しているように見える。

第二の部分では、『巨史』「両滴珠」では登場する人物たちの名前が記されておらず、事件の展開を記すだけのものであった。凌濛初は、登場人物たちに名前や来歴を与え、展開をわかりやすくすると同時に、鄭月娥と姚乙の恋愛譚を盛り込み、主要登場人物に昇格させている。

そして第三の部分でも、物語の展開をわかりやすく整理するとともに、鄭月娥と姚乙の二人を添い遂げさせ、姚滴珠とその偽物鄭月娥の双方に団円を与えている。『巨史』「両滴珠」がその題のとおり滴珠とその偽物にまつわる事件を記すものであったのに対し、『拍案驚奇』巻二はその題目に鄭月娥の名前が登場していたことからわかるように、姚滴珠と潘甲、鄭月娥と姚乙という二組の男女の団円を描く物語になっているのである。

凌濛初は『拍案驚奇』巻二において、基本的に『巨史』「両滴珠」に記された物語の展開を踏襲しているが、意図的に虚構を織り交ぜることで、自らの望む方向に読者を導いていることがうかがえよう。

四、二つの『巨史』と『拍案驚奇』

潘之恒『巨史』には二種類の版本がある。一つは万暦40年（1612）の顧起元の序が付された浙江図書館蔵『巨史鈔』存一一六卷（一名『巨史』）残本（以下「『巨史鈔』」）で、一つは潘之恒の死後、ひとまず一部を刊行する旨を記した天啓6年（1626）の識語をもつ『巨史』九十三卷（国立公文書館等蔵、以下「天啓『巨史』」）である。いずれも「二拍」以前に刊行されたと考えられ、凌濛初は両版本とも見られた可能性がある。

『巨史』と「二拍」の関係を指摘した韓結根氏は、『巨史鈔』の構成が混乱し、残本しがなく、原作の全貌を見ることができないとして、比較対象として天啓『巨史』を用いた。また筆者は別稿で『二刻拍案驚奇』巻三十の取材源について論じ、天啓『巨史』外篇巻一（『巨史鈔』雑篇巻一）の記事を取り上げたが、この際には、ひとまずより古い内容を残していると考えられる『巨史鈔』を比較対象とした¹³。天啓『巨史』外篇巻一と『巨史鈔』雑篇巻一については、同巻内の記事「韓鶴算」における『巨史鈔』の脱字（「夢雲」という名が一箇所「夢」になっている）が天啓『巨史』で修正されているという違いがあるものの、両者は同じ内容で、議論に影響はない。同様に、本稿で取り上げた「両滴珠」

13 注6拙稿。

及びその附録の柔福公主の記事についても、『亘史鈔』及び天啓『亘史』に収められる記事は同文で、どちらの版本に基づいたとしても同じ結論が得られる。しかし、凌濛初が『亘史』のどちらの版本を利用したのかについても、検討せねばなるまい。

第二節で述べたとおり、韓結根氏が『亘史』に基づいたと指摘する「二拍」作品は六作品あり、別稿で取り上げたようにこれらすべてが『亘史』を取材源とする作品であるかどうかについては、未だ検証の必要があろう。しかし、本稿で扱った『拍案驚奇』巻二に加え、それに連続する二作品、すなわち『拍案驚奇』巻三、巻四は、韓氏の指摘する中でも特に『亘史』に取材した可能性が高い。『拍案驚奇』巻二については、本稿第二節で述べた通り韓氏の指摘を否定する材料は見つかっていない。『拍案驚奇』巻三については、上原徳子氏が韓氏の指摘を再検討した上で、今見られる資料のうちでは『拍案驚奇』巻三は『亘史』に基づいたとするのが妥当であると結論づけている¹⁴。

更に『拍案驚奇』巻四についても、『亘史』に基づいたとする韓氏の指摘は妥当なものと考えられる。『拍案驚奇』巻四は九つの入話、すなわち九人の女俠についてのエピソードが並び、正話は女俠韋十一娘についての物語である。従来の研究では、九つの入話の元になった記事を全て載せる書籍は見つかっておらず、『太平広記』、『女紅余志』、『夷堅志補』の三書籍に分散して指摘されていた。正話については、『拍案驚奇』巻四本文中に「秣陵太史の胡汝嘉に「韋十一娘伝」が有る（秣陵胡太史汝嘉有「韋十一娘伝）」と記され、『刪補文苑楂橘』¹⁵に「韋十一娘」と題する記事があることが指摘されていた¹⁶。ところが、韓氏がいうように、『亘史』（天啓『亘史』）外紀巻三には『拍案驚奇』巻四の入話が九つ、順序も同じく並び、更には『拍案驚奇』巻四の冒頭の賛とまったく同じものが掲載されている。そしてその次に「韋十一娘伝」の記事が収められ、冒頭に「建業胡汝嘉曰」とある。入話から正話まで並ぶ十話の順序、賛、「韋十一娘」という記事の名称と胡汝嘉の名までもが一致しており、まったく同じ排列の書籍が発見されない限り、『拍案驚奇』巻四が『亘史』に基づいたものと考えられるしかないだろう。

しかも『亘史』に関連する作品が『拍案驚奇』巻二、三、四と連続しておかれていることにも注目したい。「二拍」においては、『耳談』に基づいたと考えられる作品¹⁷、『元曲選』に基づいたと考えられる作品¹⁸も近い巻に集中しており、同一書籍に基づいた作品が集中しておかれる傾向があると思しい。『拍案驚奇』巻二、三、四と『亘史』の関

14 上原徳子「『劉東山』小考」（『研究論文集—教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集—』第2巻第1号、2008。初出は『宮崎大学教育文化学部紀要 人文科学』第18号、2008）。

15 朝鮮の文人による文言小説集という。『朝鮮所刊中国珍本小说叢刊』（上海古籍出版社、2014）第8冊附録朴在淵氏解説参照。韋十一娘の記事については、同書に朝鮮活字本と鈔本の二種類の影印を取める。いずれも『亘史』「韋十一娘伝」と数文字の異同を除いてはほぼ同文であるが、冒頭の「建業胡汝嘉曰」という文言が見えず他にも胡汝嘉の名はなく、題目を「韋十一娘」とする。

16 小川陽一『三言二拍本事論考集成』、注5参照。

17 村田和弘「『耳談』と『拍案驚奇』—「二拍」の来源問題について」（『筑波中国文化論叢』12、1992）。『耳談』に基づいたと考えられる物語が『二刻拍案驚奇』巻二十七から巻三十一に七話集中していると指摘する。

18 拙稿「凌濛初「二拍」と『元曲選』」（『中国俗文学研究』第26号、2023）。『元曲選』に基づくと考えられる物語が『拍案驚奇』巻三十三から三十八の間に四話集中している。

係も、同様の傾向を示しているように見えるのである。

そして、これら三作品が『亘史』に基づいたものと仮定して『亘史』の二版本、『亘史鈔』と天啓『亘史』とにおける記事の排列を見比べてみると、天啓『亘史』の排列のほうが取材源として自然に見える。『拍案驚奇』巻二、三、四が基づいたと考えられる『亘史』の記事は、天啓『亘史』の場合それぞれ、『亘史』外紀巻十四艶部「両滴珠」、同巻四俠部「劉東山遇俠事」及び同巻三俠部に収められる十話である。ところが、同じ記事を『亘史鈔』で見ると、「両滴珠」は外紀巻十（巻数は版心による。影印を収める『四庫全書存目叢書』の頁数を示せば子193-602～604）、「劉東山遇俠事」は外篇豪俠巻一（子194-2.3）、女俠九人の記事は外紀女俠巻（巻数不明、子193-352～361）、「韋十一娘伝」は外篇女俠巻九（巻数は版心による、子194-19～22）、と排列が異なる。天啓『亘史』では外紀巻三、四、十四にまとまって収められているものが、『亘史鈔』では外篇、外紀と分かれており、特に『拍案驚奇』巻四については、正話のもとになったと考えられる記事と、入話のもとになったと考えられる九つの記事と賛とが、外篇と外紀に分かれて収められている。『亘史鈔』は残本しか現存せず、元来どのような書籍であったのか不明点が多い。しかし、現存する二種類の版本を見る限りでは、どちらかといえば、凌濛初が天啓『亘史』に基づいて『拍案驚奇』を編んだと考えるほうが自然だといえるだろう。

おわりに

『拍案驚奇』巻二は、入話、正話ともに『亘史』「両滴珠」に基づいて敷衍されたものであるという前提に基づき、両者を比較し、凌濛初が『亘史』「両滴珠」をどのように改変したかを見てきた。基本的に『亘史』の内容は踏襲され、大きな変更は加えられていないものの、少なからず加筆されており、その加筆の傾向から凌濛初なりの意図が作品に込められていることが読み取れた。また、『亘史』には二種類の版本が現存しているが、「二拍」のもとになったと考えられる記事の排列は、凌濛初が現存する版本のいずれかに限っていえば天啓『亘史』を見ていた可能性を示唆しているように見える。尚、韓氏が指摘する『拍案驚奇』巻十六、二十五のもとになったとする記事も、天啓『亘史』では『拍案驚奇』巻二、三、四のもとになったと考えられる記事同様外紀に収められるが、この二作品については類話が『亘史』以外にも見られることが指摘されているため、稿を改めて論じることとしたい。

(かさみ やよい・高崎経済大学経済学部准教授)

本研究はJSPS科研費 20K12948の助成を受けたものです。